雪月花

第１話　「夢屋敷家の３姉妹」

　街外れに、とても大きなお屋敷があったりする、少し田舎の町を思い浮かべてください。十年や二十年では、とてもこうはならない大きな樹木に囲まれて、少なくとも人の一生分くらいは建っている静かなお屋敷です。「夢屋敷家」といいます。

　「旧家・夢屋敷家」には、当主である母親の帰りを待つ３人のお嬢様が暮らしていています。夢屋敷家の家督は女性が受け継ぐ、それが代々伝えられた夢屋敷家のしきたりです。

『夢屋敷家　朝食の食卓』
「わっちゃー！　なんで起こしてくんないだよ、雪姉え！　飯喰う時間ないじゃん！」
「２度も起こしたわよ、花乃」
「起きるまで起こせよ！」
　夢屋敷家の朝食は、朝日の射し込むダイニングルームでとることになっています。朝食を洋風にしたのは、これから御紹介する３人のお嬢様方の、祖母にあたる方です。
「それにね、我が家では『飯』なんてものをテーブルに並べる習慣は無いの。ここに用意されているのは、わたし達のために心を配ってくれる人達が作った『朝食』よ」
　騒がしいお嬢様を、冷たい視線で迎え撃つお嬢様。もうひとり、薫り高いブレッドを、はむはむとマーマレードで味わってるお嬢様がいらっしゃいます。
「月姉えも、起こしてくれたらいいじゃん！」
　はむはむ、こくん。
「だって花ちゃん、起こしに行ったら、もうお腹いっぱいって言ってたよ」
「それは寝言だよ！」
　御紹介しましょう。けたたましく朝食の席に現れた、ボーイッシュな美少女が「三女『夢屋敷花乃（はなの）』」さん。制服が真新しいのは、中学生になったばかりだからです。縁なし眼鏡の眼光鋭く、すでに家長の貫禄で花乃さんをたしなめているのが「長女『夢屋敷雪乃（ゆきの）』」さん。お歳を召しているから貫禄が身に付いたわけではありません。名門女子校の２年生、花の年頃です。
　となれば、残っているのは「次女『夢屋敷月乃（つきの）』」さんですね。まったりとされていますが、来年高校受験を控えた、中学３年生です。
「いいから、まず襟のタイを締めて、席にお着きなさい」
「だから時間ないんだって！」
　花乃さんがいつもの椅子に座ったとたん、テーブルに可愛らしいお弁当のバスケットと、それとは別にラップで包まれたサンドウィッチが置かれます。
「今日も花乃様がお好きな、カツレツのサンドウィッチにいたしましたが」

雪月花

「わあ、ありがと、クマちゃん」
「花乃、久間蔵さんのことを、久間ちゃんなんて呼ぶのはおよしなさいと何度言ったらわかるの？　久間蔵さんはお母様の使用人であって、わたし達にとっては、敬意を払うべき年長の男性よ！」
「雪乃様、その辺はまあ、いいではありませんか。わたくしは、夢屋敷家にお仕えしているのですから」
　朝だというのに正装に身を包み、お嬢様達のテーブルの脇に控えた真っ白な口髭が微笑みます。
「ただ花乃様、登校途中に、歩きながら召し上がるというのは、この久間蔵もお許しできませんよ」
「大丈夫だよねえ。花ちゃんって、歩きながら食べられるほど器用じゃないもん」
「そうだけど、月姉えに言われたくない！」
「久間蔵さん、花乃を可愛がってくださるのは有り難いんですげと、甘やかすのはこの子のためにならないといつも言っているでしょう」
「はい、伺っております。ですが雪乃様、花の乙女が朝から眉間にしわを寄せるのは感心しませんと、わたくしもいつも申し上げております」
　執事・久間蔵の反撃。こういうのを年の功と言うのでしょう、雪乃さんは口をつぐむしかありません。
「やったー！　クマちゃんの勝ちー！」
「花乃様、お姉様のお叱りを、きちんとお聞きにならないその態度もいけません」
「それから、『雪乃様は留守にされる事の多いお母様に替わって、花乃様を立派な淑女にされようと日々心を砕いておいでなのです』って続くんですよねえ、久間蔵さん」
「仰る通りです、月乃様。ですが月乃様も、お出かけになる前に、口元のマーマレードをお拭きになったほうがよろしゅうございます」
「えー、付けてます？」
「うん、付いてる」
「ほら月乃、拭いてあげるからこっちをお向きなさい」
　久間蔵氏の、優しい目尻の皺に包まれて、これが夢屋敷家のいつもの朝です。

『夢屋敷家　玄関』
　朝食も済み、と言っても花乃さんは食べていませんが、これは何処の家庭にもある慌ただしい朝の風景。
「えっと、これは花ちゃんの靴だから、わたしのは、」
「もたもたするなよ月姉え、遅刻しちゃうだろ！」
　ただし、狭い出入り口に住人が渋滞しているわけではありません。旧家・夢屋敷家の玄関は、人が住めるくらい広い『土間』です。ですからもちろん、靴だって雪乃様、月乃

様、花乃様の順に、上框の下に並んでいます。
「だから、いつも真ん中にあるのが月姉えのなんだってば！」
「ほら、ふたりとも早くなさい」
　雪乃さんが靴も履かずに、腕組みして妹ふたりを見下ろしているのは、雪乃さんだけは久間蔵氏運転の自家用車で登校するからです。それに、家人が出掛けるのを見送るのは、夢屋敷家では「当主」の大切な務めなのです。雪乃さんは、まだ「代理」ですが。
「では、行ってまいります」
「あ、ちょっと待ってよ、月姉え」
　可愛らしく靴先をとんとんと打ちながら、月乃さんが細い格子のガラス戸をカラカラカラ。花乃さんは、まだ靴紐に手間取っています。
「あ、お早うございます！」
「あらあ、悠太くん、今日も花ちゃんのお出迎え？」
　扉の向こうには「紅顔」の少年。大きすぎる学生服に身を包み、鼻をほじるのを止めて最敬礼です。
「月乃先輩、お早うございます！」
「おはよう」
「お早う、蝶野君。花乃がいつも待たせてしまって悪いわね」
「い、いえ！」
　雪乃さんにも声を掛けられ、もはや直立不動状態のこの少年、『蝶野悠太君』といって、花乃さんの小学校からの同級生です。
「おー、悠太！　ちょっと待っててくれ」
　学校では、「子分のような彼氏」と言われています。
「ごめんね、悠太くん」
　遅刻しそうだというのに、月乃さんが女神のように微笑みます。
「い、いやあ、」
　おやおや、月乃さんを見る蝶野君の瞳が、仔犬のようにとろりんとしていますね。まあ、数ヶ月前まで小学生だった男の子にとって、３年生の先輩は、すごく大人の女性に見えたりしますからねえ。
　パコーン！　これは花乃さんの投げたサンダルが、蝶野君の頭に当たった音です。もちろん、柔らかいゴム底のやつですよ。
「いってー！　なにすんだよ、花乃！」
「あらあらぁ」
「なんてことするの花乃！」
「なんだよ、雪姉えがいつも女らしくしろって言うから、悠太の寝ぐせを注意してやったんだろ！」
「花乃！　朝に殿方の髪が乱れていたら、黙って蒸しタオルでも用意してあげるのが女

らしい気遣いってものです！」
「マジいてえ！」
　涙目で花乃さんを睨みながら、頭をさする蝶野君。ほんとに痛そうです。
「あー、悠太くん、蒸しタオル使う？」
「月姉えってば！　そんな時間ないだろ！」
「雪乃様、お車のご用意が整いました」
　小さな学生服などさらりとかわし、執事・久間蔵が玄関に現れました。
「月乃お嬢様、行ってらっしゃいませ。花乃お嬢様も、お早くなさったほうがよろしゅうございます」
「あ、久間蔵さん、ちょうどよかった。花乃が蝶野君にサンダルを投げつけて、悪い所に当たってしまったようなの」
「おや、これは気付きませんでした。そこで痛いとわめいているのは、花乃様のご学友の少年でしたか。まさか男児が婦女子に泣きを入れるとは考えもしなかったので、別人かと思いましたが」
「・・・痛く、ないです」
「よく聞こえませんなあ」
「痛くないです！」
「よろしい。では花乃様と月乃様をよろしくお願いします」
　月乃さんが蝶野君の頭に手を伸ばそうとすると、脱兎のごとく飛び出した花乃さんが、学生服の腕をひったくります。
「早くしろよ、悠太！　遅刻しちゃうだろ！」
　それが誰のせいなのかは、花乃さんには関係なさそうです。ずんずんと歩く花乃さんに引きずられていく蝶野君。その姿に月乃さんが笑みを、雪乃さんが溜息をもらしたその時、
「あ、月乃様、花乃様。恐れ入りますが、今日は終業しだい真っ直ぐお屋敷にお帰りください」
　ふたりの後を追おうとしていた月乃さんと、やっと蝶野君と並んで歩く格好になっていた花乃さんが、姉妹らしく同じ仕草で振り返ります。
「あ、あの、今日はわたし部活があるんですけど」
「そうだよ、急に言われたって約束あるもん。な、悠太！」
「なんか、あったっけ？」
「申し訳ありませんが、もしかすると、とても大切なお客様がいらっしゃるかもしれませんので」
「お客なら、雪姉えがいればいいじゃん！」
「そういう訳にはいかない、大切なお客様なのです、花乃様」
　久間蔵氏の表情を見た花乃さんが息を呑みます。それはまだ幼かった３姉妹を叱る時

にだけ見せた、「鬼の久間蔵」と同じだったからです。その顔に凍り付いたのは、花乃さんだけではありません。
「あ、はい、まっすぐ帰ります！　ね、ね、花ちゃんもだよね！」
「は、はい！　約束は明日でした！」
「雪乃様も、今日は終業の時刻きっかりにお迎えに伺わせて頂きます。よろしゅうございますね」
「・・・分かりました」
　極めて平静を装っている雪乃さんですが、本当はもの凄くビビっています。なにせ真っ赤になるほど久間蔵氏に尻を叩かれた記憶は、姉妹の中でも年長の分だけ多いのですから。

『通学路』
「やっぱ、久間蔵さんって怖えーよな」
「そうかなあ？」
　順調に登校している様に見えますが、まだ夢屋敷家を巡る生け垣脇の私道です。砂利を蹴散らしながら歩くカップルの後を、月乃さんが、蟻も踏まないようにのんびり付いて行きます。
「朝メシ喰った？」
「ううううん」
「やった！」
「なんで？」
「またタヌキさんのカツサンドだろ！」
「あげない」
「・・・あの、悠太君、『タヌキさん』じゃなくて、『環さん』だからね」
　環さん、というのは、夢屋敷家の家政婦です。台所の全てを取り仕切っています。素晴らしき「料理人」であると同時に久間蔵氏にも意見する実力者なので、後々ご紹介しましょう。
　夢屋敷家の敷地の外れ、ここから公道という角に、美しい黒猫が座っています。遅刻しそうなのに呑気な３名様の、お見送りといった風情です。
「あ！　福だ！　あれ福だよな、花乃！」
　俺は夢屋敷家に詳しいぜ、と花乃さんにいい所を見せたい悠太君。得意気ですが違います。
「あれは幸だよ」
　黒猫の「福（ふく）」と「幸（さち）」は、夢屋敷家の飼い猫です。まさに瓜二つの双子の黒猫らしいのですが、そこは旧家夢屋敷家のこと、飼い猫ですら謎めいています。いったい何時から飼われているのかも不確かです。

「ニャア」
「うん、行ってくるよ、幸」
「はい、行ってきます、幸」
「ミー」
　漆黒の身を翻し、黒猫『幸』が生け垣の枝を揺らして消えてゆきます。
「ねえ花ちゃん、大切なお客さんて誰かな？」
「わかんないけど、あそこまで言うんだから大切なんだろ？」
「なあ花乃、福と幸って、どう違うんだよ？」
「福は雄、幸は雌、見たらわかるだろ？」
「わかんねーよ！」
「悠太君無理だよ。どっちが福でどっちが幸かは、花ちゃんにしか分からないんだから」

『夢屋敷家　前庭』
　夢屋敷家の自家用車は、「白鳥号」といいます。もちろん３文字の外国製ですが、とても古いものです。なにせ３姉妹の母上『星乃様』が幼い頃、新車の黒塗りを愛でて白鳥と名付けたくらいですから。
　いつも通り、後ろの座席に乗り込もうとした雪乃さんが、うやうやしくドアを押さえている久間蔵氏を振り返ります。
「あの、久間蔵さん」
「はい、何でございましょう、雪乃様」
「大切なお客様というのはどなたですか？　お母様のお戻りが遅れている事と、何か関係があるのですよね？」
「申し訳ございませんが、そうかもしれませんし、そうでないかもしれません。ともかく今は、今日一日の御学業にお励みください」
　後部座席のドアがパタン、運転席のドアがパタン。キュルル、キュルキュルっとエンジンが息を吹き返します。
　全ての運転装置を指差し確認、いざ走り出そうする直前、久間蔵氏がいつになく雪乃さんを振り返り見詰めます。
「・・・雪乃様」
「はい？」
「久間蔵は、雪乃様が産声をお上げになった日を、昨日のことのように覚えております」
「は、はあ」
「風太郎坊ちゃまが、それはお喜びになられて」
「叔父さんが？」
「はい、それはもう。産着にくるまれた雪乃様を抱いて、奥様にお返しにならないくらいでした。雪乃様は、大きなお声でお泣きになられて」

雪月花

　老人の追憶の瞳は、実は雪乃さんの面差しに在りし日の「恋人」を偲んでいます。それが雪乃さんのお祖母様、「琴乃様」であることは、雪乃さんもお母様から耳打ちされて知っています。それがまだ、結婚が家柄に縛られていた時代の悲しいロマンスだった事も。

　それでも、問われもせず昔語りをする久間蔵氏というのは、やはり尋常ではありません。

「久間蔵さん、やはり何かあるのですね？　長女のわたしだけには、話して頂かないと困ります」

「・・・余計なことを申し上げました。発車致します」

　白鳥号が、ジャリジャリと玉石を踏みしめ走り出します。

　雪乃さんには、夢屋敷家が普通でない事くらい、物心の付いた頃から分かっています。何か特別な、しなければならないような事が、この家にはあるのだろうと。それがなんなのか、幼い日から幾度となく問うてきましたが、夢屋敷家の大人達はまだ早いという微笑みを返すだけでした。

　白鳥号はいつもの通りを抜け、雪乃さんの学舎へと向かいます。

－つづく－